様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月　 ９ 日現在

機関番号：１１３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０４８１０

研究課題名（和文）先天盲ろう児における共創コミュニケーションの形成と促進に関する研究

研究課題名（英文）A study on formation and promotion of co-creating communication in congenital deafdlind children

研究代表者

菅井　裕行（SUGAI, HIROYUKI）

宮城教育大学・教育学部・教授

研究者番号：９０２９０８９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は先天盲ろう児のコミュニケーション発達の諸相を明らかにし、その支援方法について共創コミュニケーションという研究パラダイム上で検討するものである。本研究期間の中で、近年の共創コミュニケーション研究の動向について、実際に共創コミュニケーション研究に携わる研究者との研究交流によって調査した。また、我々自身の長期にわたる支援を事例研究としてまとめた。これらの取り組みから、共創コミュニケーションの枠組みが、重度・重複障害の状態にある先天盲ろうの子どもへの支援においても有効であること、また欧州と我々との取り組み上の共通点・相違点が明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果は、これまで極めて少数の研究者によって執り行われてきた先天盲ろうの子どもに関する研究のうち、そのコミュニケーション発達の諸相を明らかにし、その形成と促進に係る重要な視点を明らかにした。理論的背景として欧州における共創コミュニケーションの研究パラダイムとの比較を行い、共通点と相違点を見いだすことができた。今後、先天盲ろうのコミュニケーション発達や感覚障害児の教育的支援に関する国際的視野での研究交流の足場を築くことができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify various aspects of communication development in congenital deafblind children, and to examine their support methods in the research paradigm of co-creative communication. During this research period, recent trends in co-creative communication research were investigated through research exchanges with researchers who are actually involved in co-creative communication research. We have also summarized our own long-term supports as case studies. From these efforts, we confirmed that the framework of co-creative communication is effective in supporting congenital deafblind children who are in a state of severe and multiple disabilities, and the similarities and differences between Europe and us.

研究分野：特別支援教育

キーワード：先天盲ろう　共創コミュニケーション　ケーススストーリー研究　実践研究　国際比較

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

先天のもしくは生後すぐに視覚聴覚二重障害(盲ろう)になった場合、その障害特性から自然言語の発達が見込まれず、その発達課題はコミュニケーション課題を中心に、多様かつ複雑である。先天盲ろうの子どもに対する教育的支援をどのように構想するかについて、我が国ではまだ盲ろう教育そのものが、実践的蓄積はあっても、研究的蓄積に関しては少数の関心を有する研究者が個別に展開している状況と言わざるを得ない。「盲ろう」という障害カテゴリーすら未だ公的に成立しておらず、教育実践の分野でもこの教育に関わる専門家は少数にとどまっている。「盲ろう」を障害カテゴリーとして法的に認めている諸外国では、実践研究をベースとした研究者間のネットワークが形成され、その研究成果が発表されてきている。特に欧州では、一つ一つの国における盲ろう研究者は少数であるがその地理的条件を活かし国を越えて情報を共有し共同で研究するスタイルが定着している。特に聴覚障害教育の発展において独自の展開をみせる北欧圏の研究者を中心にした研究パラダイムがここ数年注目を集めてきた。自然言語の発達が困難である先天盲ろうの子ども達においては、できるだけ早期から意図的・計画的なコミュニケーション支援を行って言語発達を形成・促進していくことが求められる。このことを踏まえて主に北欧圏では、共創コミュニケーションと名付けられた研究パラダイムのもと、多様なコミュニケーション手段の獲得へと至る教育方法が開発されている。我々研究チームは、この「共創コミュニケーション」という研究パラダイムで研究する欧米の研究者とも情報共有できる内容として、我々自身がこれまで継続してきた実践研究の成果の一部を 2012 年から 2014 年に行われた科学研究費補助金研究「先天性盲ろう児の共創コミュニケーションに関するデータベースの構築」の補助を受けてデータベース化した。我々のこれまでの研究と欧州を中心に取り組まれている研究とを比較検討し、我々の研究の独自性を明らかにするとともに、その比較研究から見いだされる研究的視点を理論的に整理し、その比較検討された内容を踏まえて我々の実践研究をどのように今後展開していくかを検討する必要があると考えた。またその検討結果を報告することで、我が国においても内外で研究ネットワークを形成し、実際の教育現場への支援に貢献できる知見を明らかにできるのではないかと考えた。

２．研究の目的

本研究では、主に北欧圏で研究されてきた共創コミュニケーションの研究パラダイムや我々がこれまでに蓄積してきたデータベースを参考にしつつ、先天盲ろう児におけるコミュニケーション発達を支援する方法や視点を明らかにすることを目的としている。近年は、医療技術の進歩に伴う障害の重度化・重複化と相俟って、先天性盲ろう児においても障害の複雑化が進んできており、視覚と聴覚の障害に併せて他の重度な障害が付加された子どもへの対応が必要である。共創コミュニケーションの研究を推進してきた北欧を中心とするアプローチにおいては、重度の知的障害や肢体不自由を併せ有する先天盲ろう児事例による検証が希薄であったが、われわれのこれまでの実践研究では、むしろ重度・重複障害でもある先天盲ろう児を対象として取り組んできている。そこで本研究では共創コミュニケーションという研究パラダイムに基づいた、重度・重複障害でもある先天盲ろうの子どもとのコミュニケーションの形成と促進について、事例的な取り組みを通じて明らかにすることが必要であると考える。

３．研究の方法

本研究は主に次の３つの方法によって行われた。１つは、近年の共創コミュニケーション研究の動向を把握し、これまでの成果を整理することである。２つめは、我々がこれまで行ってきた実践研究について共創コミュニケーション研究を担ってきた欧州の研究者と協議し、その相違点や共通の課題を明らかにすることである。３つめは、各研究分担者がそれぞれ長期的に取り組んでいる重度の障害を有する先天盲ろうの子どもとの教育的係わり合いについて、その特徴や経過分析から導出される視点にそって経過全体を「物語る」事例研究を試み、特に先天盲ろうの子どもとの相互的・共同的コミュニケーションの形成と促進に視点をおいて経過を整理することである。１つめと２つめについては、協力関係にあるオランダのフロンニンゲン大学の Janssen 教授と連携し、教授を我が国に招聘して研究協議会を行うこととし、３つめについては我々研究チームで研究協議会を積み重ねてその中でそれぞれの事例研究を取り上げて検討することとした。さらにその成果の一部を共創コミュニケーション研究に取り組んでいる研究者が介する研究会において発表することとした。

４．研究成果

（１）共創コミュニケーション研究の近年の動向

北欧における共創コミュニケーション研究のパラダイムについて、オランダのケンタリスから発行された Communication and congenital deafblindness を全員で購読し、和訳を作成してその理論内容を確認し合った。このブックレット発刊以降の欧州における研究は、ブックレットにまとめられた内容の理解と普及のために会合がもたれたり、フロンニンゲン大学においてブックレット作成に関係した研究者が講師となって学生研究を指導するなどの、「啓蒙的」な活動が中心に行われており、また大学での研究としては学校や施設等における実践を査定したり、コンサルテーションしたりする研究が多く取り組まれ、またそのためのプログラム作成に着手していることがわかった。理論的発展のために国際研究集会等を開催し、隣接する分野の研究者を招聘して検討する学際的取り組みはなくなり、オランダの Groningen 大学を研究拠点として、ここで次世代の研究者を養成し、研究誌を発刊して研究蓄積に取り組むようになっている。全てを網羅したわけではないが、その多くの研究から先天盲ろうのコミュニケーション発達に

おける一つの方向性として手話言語への接続が強く意識されている傾向を見て取ることができた。先述のブックレットによれば、自然言語の成立が困難だとされる先天盲ろうの場合、最初は独自のモードの形成・促進が試みられるが、徐々に社会性あるやりとりへと変化し、その先に文化的言語への接続が想定されている。この文化的言語の一つとして手話言語が考えられており、共創コミュニケーション研究の中に最初からこの方向への接続を強く意識していると思われる取り組みがあることが見出された。

（２）日本における共創コミュニケーション研究と欧州の研究との対話

欧州における共創コミュニケーション研究の拠点である groningen 大学から Marleen Janssen 博士を招聘し、本研究の分担者と共に研究ワークショップを開催した。そこでは「共創コミュニケーション」研究を欧州で牽引してきた Janssen 教授が直接我々の研究についてコメントし、それをもとに協議を行った。この協議によって我々の研究の特色や今後の展望を確認することができた。この招聘プログラムでは、研究ワークショップとは別に学校現場で盲ろう児を担当している教員を対象とした研修会や一般参加可能な講演会をも実施し、参加者を交えた議論を行った。共創コミュニケーションの基盤として重視されている接近-会費の共同調整や自発的探索活動をコミュニケーションを通じて支え、その一層の展開をたすけていくことの重要性は、我々のこれまでの取り組みとも共通していた。先天盲ろうの子どもとのかかわりにおいて最も困難なことの一つと見なされている感情共有についても、活動を共同化する中で身体接触を通じて対話的な機能を加えていく方向性が重要であるとする点で、我々がこれまでの事例研究で見出してきた視点と通じるものがあった。ネゴシエーションを通じての共有語彙や意味の共有については、共創コミュニケーション研究において整理されたような構造を我々は指摘できていなかったが、その基盤となるやりとり関係の形成と持続の重要性もまた共通する視点であることが確認できた。

（３）長期的視点にたった事例研究

各研究分担者がこれまで取り組んできた実践研究について、各自が比較的長期にわたる係わり合いに基づく事例を取り上げ、ケースストーリー研究の手法を参考にしつつ、経過をまとめ発表し、その研究内容について協議を行った。その一端は、この科研の研究期間中毎年学会においてシンポジウムを開催し、そこで発表・協議を行った。

本研究は 2018 年度で終了予定であったが、2019 年 8 月の国際盲ろう学会(Deafblind International World Conference)にて発表するように依頼を受けたことから、研究期間を 1 年延長して、2019 年度までの研究とした。われわれが以前に作成したデータベースを再整理した内容と今回の事例研究の一部について、この学会における Marleen Janssen 博士が主催するコミュニケーション・ネットワーク・プレカンファレンスで発表した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 菅井裕行	４．巻 25
２．論文標題 先天盲ろう児のコミュニケーション発達	５．発行年 2016年
３．雑誌名 手話学研究	６．最初と最後の頁 17-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 菅井裕行	４．巻 11
２．論文標題 盲ろう二重障害児教育実践	５．発行年 2016年
３．雑誌名 宮城教育大学特別支援教育総合研究センター研究紀要	６．最初と最後の頁 87-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大槻萌・中村保和	４．巻 66
２．論文標題 知的障害のある弱視児と係わり手との共同活動の質的変容に関する一考察	５．発行年 2020年
３．雑誌名 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編	６．最初と最後の頁 161-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 岡澤慎一	４．巻 70
２．論文標題 重度の知的障害と肢体不自由がある先天盲難聴児の身体接触を基盤としたやりとりにおける内的活動の諸相	５．発行年 2020年
３．雑誌名 宇都宮大学教育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 97-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計18件（うち招待講演　6件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 菅井裕行
2．発表標題 先天盲ろうにおけるケースストーリー研究Ⅱ(弱視ろうから全盲ろうとなった子どもと家庭へのチームサポートからの考察:両親インタビュー)
3．学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 中村保和
2．発表標題 先天盲ろうにおけるケースストーリー研究Ⅱ(弱視ろうから全盲ろうとなった子どもと家庭へのチームサポートからの考察：小学部高学年以降の係わり合い)
3．学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 菅井裕行
2．発表標題 盲ろう二重障害教育の基本と実際
3．学会等名 第45回視覚障害教育・心理研究会（招待講演）
4．発表年 2018年

1．発表者名 菅井裕行
2．発表標題 共同活動の形成と共創コミュニケーション
3．学会等名 重複障がい教育フォーラム（招待講演）
4．発表年 2018年

１．発表者名
岡澤慎一

２．発表標題
Yくんとの行動の意味共有を志向するなかで重ねられるコミュニケーションと行動調整の促進

３．学会等名
重複障がい教育フォーラム（招待講演）

４．発表年
2018年

１．発表者名
中村保和

２．発表標題
出来事の共有にもとづくコミュニケーションー弱視ろうのSさんとの対話の共創をめざして

３．学会等名
重複障がい教育フォーラム（招待講演）

４．発表年
2018年

１．発表者名
菅井裕行

２．発表標題
先天盲ろうにおけるケースストーリー研究Ｉ（卒後の係わり合い）

３．学会等名
日本特殊教育学会第55回大会

４．発表年
2017年

１．発表者名
中村保和

２．発表標題
先天盲ろうにおけるケースストーリー研究Ｉ（学齢期の係わり合い）

３．学会等名
日本特殊教育学会第55回大会

４．発表年
2017年

１．発表者名 菅井裕行
２．発表標題 盲ろう二重障害の子どもの理解と指導
３．学会等名 第44回視覚障害教育・心理研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 中村保和・岡澤慎一・土谷良巳・笹原未来・菅井裕行
２．発表標題 先天盲ろう児との共創コミュニケーションの様相
３．学会等名 第54回日本特殊教育学会
４．発表年 2016年

１．発表者名 岡澤慎一・菅井裕行・土谷良巳・武田昌子・中村保和
２．発表標題 重症心身障害児（者）との教育的係わり合いの共創
３．学会等名 日本発達障害学会第51回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 岡澤慎一・中村保和
２．発表標題 重度・重複障害教 育におけるコミュニケーション研究の展望―子どもとの係わり合いの事実から創出される現代的課題の検討―
３．学会等名 第54回日本特殊教育学会
４．発表年 2016年

１．発表者名 土谷良巳
２．発表標題 障がいの重い子どももとの係わり合いから学ぶということー係わり手の視点が変わるときー
３．学会等名 第8回宇都宮大学重複障害教育実践セミナー（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 菅井裕行
２．発表標題 感覚活用が制限される中での対人関係の育ち
３．学会等名 重複障がい教育フォーラム（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hiroyuki Sugai
２．発表標題 Dialogue with a child who is congenital deafblind -the initial aspects of two way communication-
３．学会等名 17th Deafblind International World Conference 2019
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shinichi Okazawa
２．発表標題 Internal activity of a boy who is totally blind and hearing loss with profound intellectual and physical disabilities in mutual contact play
３．学会等名 17th Deafblind International World Conference 2019
４．発表年 2019年

1．発表者名 Yasukazu Nakamura
2．発表標題 Aspects of triadic Interaction with a child who is congenital deafblind
3．学会等名 17th Deafblind International World Conference 2019
4．発表年 2019年

1．発表者名 Yoshimi Tsuchiya
2．発表標題 A new look of braille learning from the view point of negotiation
3．学会等名 17th Deafblind International World Conference 2019
4．発表年 2019年

〔図書〕　計5件

1．著者名 障がいの重い子どもの事例研究刊行会（松田直・岡澤慎一・川住隆一・菅井裕行・土谷良美巳・中村保和）	4．発行年 2018年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 464
3．書名 障がいの重い子どもと係わり合う教育　実践事例から読みとく特別支援教育Ⅰ	

1．著者名 障がいの重い子どもの事例研究刊行会（松田直・岡澤慎一・川住隆一・菅井裕行・土谷良美巳・中村保和）	4．発行年 2018年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 464
3．書名 障がいの重い子どもと係わり合う教育　実践事例から読みとく特別支援教育Ⅱ	

1．著者名 土谷良巳・菅井裕行・中村保和・岡澤慎一・笹原未来	4．発行年 2016年
2．出版社 なし	5．総ページ数 108
3．書名 先天盲ろうの子どもとの共創コミュニケーションー理論と実際ー	

1．著者名 玉村公二彦、黒田学、向井啓二、平沼博将、清水貞夫編、菅井裕行(分担執筆)	4．発行年 2019年
2．出版社 クリエイツかもがわ	5．総ページ数 309
3．書名 新版キーワードブック特別支援教育インクルーシブ教育時代の基礎知識	

1．著者名 宮城教育大学特別支援教育講座編、菅井裕行(分担執筆)	4．発行年 2019年
2．出版社 教育出版	5．総ページ数 183
3．書名 改訂版特別支援教育への招待	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	土谷　良巳 (Tsuchiya Yoshimi) (00142000)	東京家政学院大学・現代生活学部・教授 (32648)	
研究分担者	岡澤　慎一 (Okazawa Shinichi) (20431695)	宇都宮大学・教育学部・准教授 (12201)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中村　保和 (Nakamura Yasukazu) (60467131)	群馬大学・教育学部・准教授 (12301)	